

## [市民公開講座 移り行く疾病像とその社会医学的対応]

## 趣旨説明

青木 國雄

名古屋大学

医学研究の目的の一つに、歴史的観察から疾病対策に対する評価や将来の方向を示すことがあげられる。第二次大戦後、わが国では政治・社会構造の激変、経済の成長、国民生活の安定化、健康状態の改善により、平均寿命は、50歳前後から男81歳、女87歳と延伸、出生率は低下、少子高齢化社会へ突入り新死因・疾病構造は著しく変化した。感染症、低栄養関連死亡は激減し、代わって中高年層では悪性新生物、循環器疾患、糖尿病死亡のほか、原因不明の難病患者も激増した。これらの疾病への対応は容易ではない。全年齢を通し、肥満が増加、肉体労働の減少や運動不足、各種の精神心理的ストレスなどにより心身への負担が変わり、疾病構造が変化した。中高年層の疾病は複合原因を持つので、単純な対策では解決できない。従って、地域社会集団を対象にし、確率論的にリスク要因を探索し、総合的に対処する必要がある。このような背景の中で、研究者たちは懸命の努力を重ね、難問題の解決にあたっている。

この市民講座では、肥満、悪性新生物、遺伝子療法を取り上げ、歴史的な展望のもと、実態究明と新しいテクノロジーを応用した効率的な対策の道をさぐる現況を分かりやすく解説していただく。

八谷講師は、生活習慣病の基礎にある肥満について国際的に高名な疫学者である。人類は600万年の歴史を通し、食糧不足、飢餓に悩み、この対策として、時々得られる過剰栄養を脂肪細胞として体内に貯蓄する機能を発達させてきた。それが近年、急に飽食社会となり、労働負荷の軽減など生活様式の変化もあり、結果として脂肪の貯蓄量が増大、肥満者が増加した。脂肪細胞は単にエネルギーの貯蔵だけでなく、ホルモンなどの内分泌作用など生理学的に多彩な機能をもち、多くの生活習慣病の成立に関係し、現代人を悩ませている。その肥満の実態、成立機序を分析し、癌など難治疾患発生の機序、効率的な対策と今後の問題について話していただく。肥満は社会病であるが、個性的な特性を持つことの認識も重要である。

上田講師はがん治療において数々の国際的業績を上げられている研究者であり臨床医家でもある。1981年からわが国の死因順位第一となった悪性新生物死亡は、一昨年すでに年間37万人を越し、総死亡の30%を占め、患者発生は死亡の約3倍もある。長く悪性腫瘍の特異的な治療は開発できず、早期がんに対する外科療法に頼らざるを得なかった。1947年以降、世界各地で各種の薬剤療法が開発され希望を持たせたが、効果は限定し、大きな副作用に悩まされた。近年、分子生物学的、細胞遺伝学的研究が進歩し、分子標的治療が発展、効果がより高く副作用が少なくなった。こうした薬物療法の進歩と普及について、上田講師自身が開発した治療法を含め、展望、解説される。最近、特異抗原を標的とした免疫遺伝療法が実用化されつつあり、個人個人の病の特性に従った治療、いわゆるオーダーメイド治療にも触れていただく。こうした治療法の進展は、現実ががん死亡率を大幅に減少させており、大きな期待がよせられている。

松尾講師は、癌疫学研究で数々のユニークな業績で知られている。最近では、発癌機序について、遺伝子要因と環境要因の複雑な絡み合いを、人間集団で分析検討するとともに、個性の強い疾病のリスク要因の解明につとめている。遺伝子要因には、単一遺伝子疾患と多因子遺伝子疾患があり、遺伝子は、数十万から百万もあり特定は容易ではない。一方、環境要因も地域や個人の生活歴で異なるので、病の発生には、こうした単純でない複合要因を明らかにすることが必要である。演者らは、飲酒というありふれた飲食習慣と関連する消化器癌との関連を、遺伝疫学的研究から実態を解明、その対策と予防の可能性を発表し、さらに諸疾患についての検討を続けている。しかし、こうした研究は始まったばかりで、問題は多い。今後の研究方向と期待についても論議される。